

葉

魯迅

井上紅梅訳

青空文庫

亮^{あか}るい月は日の出前に落ちて、寝静まった街の上に藍甕^{あいがめ}のよ
うな空が残った。

華老^{かろうせん}栓はひよつくり起き上つてマツチを擦り、油じんだ燈^{とうき}
盞^{さん}に火を移した。青白い光は茶館の中の二間^{ふたま}に満ちた。

「お父さん、これから行つて下さるんだね」

と年寄った女の声がした。そのとき裏の小部屋の中で咳嗽^{せき}の
声がした。

「うむ」

老栓は応えて上衣の釦を嵌めながら手を伸ばし

「お前、あれをお出しな」

華大媽は枕の下をさぐって一包の銀貨を取出し、老栓に手渡すと、老栓はガタガタ顫えて衣套の中に収め、著物の上からそつと撫でおろしてみた。そこで彼は提灯に火を移し、燈盞を吹き消して裏部屋の方へ行つた。部屋の中には苦しそうな嘖び声が絶えまなく続いてしたが、老栓はその響のおさまるのを待つて、静かに口をひらいた。

「小栓、お前は起きないでいい。店はお母さんがいい按排にする」

「……………」

老栓は倅せがれが落著おちいて睡ねむっているものと察し、ようやく安心して門かどぐち口を出た。

街なかは黒く沈まり返って何一つない。ただ一条の灰はい白しろの路みちがぼんやりと見えて、提灯の光は彼の二つの脚をてらし、左右の膝が前になり後あとになりして行く。ときどき多くの狗いぬに遇あったが吠えついて来るものもない。天気は室内よりもよほど冷やかで老栓は爽快に感じた。何だか今日は子供の昔に還かえって、神じん通づうを得て人の命の本体を掴みにゆくような気がして、歩いているうちにも馬鹿に気高くなってしまうた。行けば行くほど路がハッキリして来た。行けば行くほど空が明るくなつて来た。

老栓はひたすら歩みを続けているうちにはたちまち物に驚かされ

た。そこは一条の丁字街ていじがいがありありと眼前に横たわっていたのだ。彼はちよつとあと戻りしてある店の軒下に入った。閉め切つてある門にもた靠れて立っていると、身体が少しひやりとした。

「ふん、親爺」

「元氣だね……」

老栓は喫驚びっくりして眼を睜みはつた時、すぐ鼻の先きを通つて行く者があつた。その中の一人は振向いて彼を見た。かたちははなはだハツキリしないが、永く物に餓えた人が食物たべものを見つけたように、攫つかみ掛つて来そうな光がその人の眼から出た。老栓は提灯を覗いて見るともう火が消えていた。念のため衣套をおさえてみると塊りはまだそこにあつた。老栓は頭かしらを挙げて両側を見た。気味の悪

い人間が幾つも立っていた。三つ二つ、三つ二つと鬼のような者がそこらじゅうにうろついていた。じつと瞳を据^すえてもう一度見ると別に何の不思議もなかった。

まもなく幾人か兵隊が来た。向うの方にいる時から、著物の前と後ろに白い円い物が見えた。遠くでもハッキリ見えたが、近寄つて来ると、その白い円いものは法被^{はっぴ}の上の染め抜きで、暗紅^{あんこう}色^{しよく}のふちぬいの中にあることを知った。一時足音がざくざくして、兵隊は一大群衆に囲まれつつたちまち眼の前を過ぎ去った。あすこの三つ二つ、三つ二つは今しも大きな塊りとなって潮^{うしお}のよう^うに前に押寄せ、丁字街の口もとまで行くと、突然立ち停まつて半円状^{むらが}に簇^{むら}った。

老栓は注意して見ると、一群の人は鴨の群れのように、あとから、あとから頸くびを延ばして、さながら無形の手が彼等の頭を引張っているようでもあつた。暫時静かであつた。ふと何か、音がしたようでもあつた。すると彼等はたちまち騒ぎ出してがやがやと老栓の立つている処まで散らばつた。老栓はあぶなく突き飛ばされそうになつた。

「さあ、錢と品物の引換えだ」

身体じゆう真黒な人が老栓の前に突立つて、その二つの眼玉から抜劍ぬきみのような鋭い光を浴びせかけた時、老栓はいつもの半分ほどに縮こまつた。

その人は老栓の方に大きな手をひろげ、片ツぽの手に赤いまんじ饅頭

頭ゆうを撮つまんでいたが、赤い汁は饅頭の上からぼたぼた落ちていた。老栓は慌てて銀貨を突き出しガタガタ顫えていると、その人はじれったがって

「なぜ受取らんか、こわいことがあるもんか」

と怒鳴った。

老栓はなおも躡ちゆうちよ躡ちよしていると、黒い人は提灯を引ツたくつ

て幌ほろを下ひつつかげ、その中へ饅頭を詰めて老栓の手に渡し、同時に銀貨を引ひつつか搥おいはれんで

「この老おいはれ耄ぼれめ」

と口の中でぼやきながら立去った。

「お前さん、それで誰の病気をなおすんだね」

と老栓は誰かにきかれたようであつたが、返辞もしなかつた。

彼の精神は、今はただ一つの包（饅頭）の上に集つて、さながら
十世じつせ单伝たんてんの一人子ひとりごを抱いだいているようなものであつた。彼は今こ
の包パオの中の新しい生命を彼の家に移し植えて、多くの幸福を収め
獲えたいのであつた。太陽も出て来た。彼のめのまえには一条の大だ
道いどうが現われて、まっすぐに彼の家まで続いていた。後ろの丁字
街の突き当たりには、破れた匾へんがく額があつて「古×亭口」の四つ
の金文字きんもじが煤すすぐろ黒く照らされていた。

老栓は歩いて我家わがやに来た。店の支度はもうちやんと出来ていた。茶卓は一つ一つ拭き込んで、てらてらに光っていたが、客はまだ一人も見えなかった。小栓は店の隅の卓テーブル子に向つて飯を食つていた。見ると額ひたいの上から大粒の汗がころげ落ち、左右の肩骨が近頃めつきり高くなつて、背中にピタリとついてゐる夾襖あわせの上に、八字の皺うきもんが浮紋うきもんのように飛び出していた。老栓はのびていた眉ま宇ゆがしらを思わず顰しかめた。華大媽かまどは竈かまどの下から出て来て唇を顫まわせながら

「取れましたか」

ときいた。

「取れたよ」

と老栓は答えた。

二人は一緒に竈の下へ行つて何か相談したが、まもなく華大媽は外へ出て一枚の蓮の葉を持ってかえり卓テーブルの上に置いた。老栓は提灯の中から赤い饅頭を出して蓮の葉に包んだ。

飯を済まして小栓は立上ると華大媽は慌てて声を掛け

「小栓や、お前はそこに坐すわつておいで。こつちへ来ちやいけないよ」

と吩咐いいつけながら竈の火を按排した。その側そばで老栓は一つの青い包つつみと、一つの紅白の破れ提灯を一緒にして竈の中に突込むと、赤黒ほのおいほのおが渦を巻き起し、一種異様な薫りが店の方へ流れ出した。

「いい匂いだね。お前達は何を食べているんだえ。朝ツぱらから」

駝背せむしの五少爺ごだんなが言った。この男は毎日ここの茶館に来て日を暮し、一番早く来て一番遅く帰るのだが、この時ちようど店の前へ立ち往来に面した壁際のいつもの席に腰をおろした。彼は答うる人がないので

「炒り米のお粥かね」

と訊き返してみたが、それでも返辞がない。

老栓はいそいそ出て来て、彼にお茶を出した。

「小栓、こつちへおいで」

と華大媽は倅を喚よび込んだ。奥の間のまんなかには細長い腰掛が一つ置いてあつた。小栓はそこへ来て腰を掛けると母親は真ま黒ろな円いものを皿の上へ載せて出した。

「さあお食べ——これを食べると病気がなおるよ」

この黒い物を撮み上げた小栓はしばらく眺めている中に自分の命を持って来たような、いうにいわれぬ奇怪な感じがして、恐る恐る二つに割ってみると、黒焦げの皮の中から白い湯気が立ち、湯気が散ってしまうと、半分ずつの白い饅頭に違いなかった。——それがいつのまにか、残らず肚の中に入ってしまったて、どんな味がしたのだがまるきり忘れていて、眼の前にただ一枚の空皿が残っているだけで彼の側には父親と母親が立っていた。二人の眼付は皆一様に、彼の身体に何物かを注ぎ込み、彼の身体から何物かを取り出すようにするらしい。そう思うと抑え難き胸騒ぎがしてまた一しきり咳嗽込んだ。

「横になつて休んで御覧。——そうすれば好くなります」

小栓は母親の言葉に従つて咳嗽入りながら睡つた。

華大媽は彼の咳嗽の静まるのを待つて、ツギハギの夜具をそのうゑに掛けた。

三

店の中には大勢の客が坐つていた。老栓は忙しそうに大藥罐おやかんを提げて一さし、一さし、銘々のお茶を注いで歩いた。彼の両方のまぶたの眶は黒い輪に囲まれていた。

「老栓、きようはサツパリ元気がないね。病気なのかえ」

と胡麻塩ひげの男がきいた。

「いいえ」

「いいえ？　そうだろう。にこにこしているからな。いつもとは違う」

胡麻塩ひげは自分で自分の言葉を取消した。

「老栓は急がしいのだよ。悴のためにね……」

駝背の五少爺がもつと何か言おうとした時、顔じゆう瘤こぶだらけの男がいきなり入って来た。真ま黒くろの木綿著物——胸の釦はしを脱はずして幅広の黒帯をだらしなく腰のまわりに括くくりつけ、入口へ来るとすぐに老栓に向ってどなった。

「食べたかね。好くなったかね。老栓、お前は運氣がいい」

老栓は片ツ方の手を葉鐘に掛け、片ツぽの手を恭々うやうやしく前に垂れて聴いていた。華大媽もまた眼のふちを黒くしていたが、この時にこにこして茶碗と茶の葉を持って来て、茶碗の中に橄欖かんらんの実を撮み込んだ。老栓はすぐにその中に湯をさした。

「あの包パオは上等だ、ほかのものは違う。ねえそうだろう。熱いうちに持つて来て、熱いうちに食べたからな」

と瘤の男は大きな声を出した。

「本当にねえ、康こうおじさんのお蔭で旨く行きましたよ」

華大媽はしんから嬉しそうにお礼を述べた。

「いい包パオだ。全くいい包パオだ。ああいう熱い奴を食べれば、ああいう血饅頭ろうしやうはどんな癆症ろうしやうにもきく」

華大媽は「癆症」といわれて少し顔色を変え、いくらか不快であるらしかったが、すぐにまた笑い出した。そうとは知らず康おじさんは破れ鐘わがねのような声を出して喋りつづけた。あまり声が大きいので奥に寝ていた小栓は眼を覚ましてさかんに咳嗽はじめた。「お前の家うちの小栓が、こういう運氣に当たってみれば、あの病気はきつと全快するにちがいない、道理で老栓はきようはにこにこしているぜ」

と胡麻塩ひげは言った。彼は康おじさんの前に言つて小声になつて訊いた。

「康おじさん、きよう死刑になつた人は夏家かの息子だそうだが、誰の生んだ子だえ。一体なにをしたのだえ」

「誰つて、きまつてまき。夏四かしナイナイの子さ。あの餓鬼め」

康おじさんはみんなが耳みみたぶ朶を引立てているのを見て、大おおに得意いになつて瘤かたまりの塊がハチ切れそうな声を出した。

「あの小わツぱめ。命が惜しくねえのだ。命が惜しくねえのはどうでもいいが、乃公おれは今度ちつともいいことはねえ。正直のところ、引ツ剥べがした著物まで、赤眼あぎの阿義にやつてしまった。まあそれも仕方がねえや。第一は栓じいさんの運氣を取逃がさねえためだ。第二は夏三爺かだんなから出る二十五両シユパシユパの雪白シユパシユパの銀をそつくり乃公おれの巾きんちやく著の中に納めて一文もつかわねえ算段だ」

小栓はしずしずと小部屋の中から歩き出し、両手を以て胸おさを押えてみたが、なかなか咳嗽ががとまりそうもない。そこで竈の下へ

行つてお碗に冷飯ひやめしを盛り、熱い湯をかけて喫たべた。

華大媽はそばへ来てこつそり訊ねた。

「小栓、少しは楽になつたかえ。やツぱりお腹なかが空くのかえ」

「いい包パオだ。いい包パオだ」

と康おじさんは小栓をちらりと見て、皆みなの方に顔を向け

「夏三爺はすばしツこいね。もし前に訴え出がなければ今頃はどんな風になるのだろう。一家一門は皆殺されているぜ。お金！——あの小わツぱめ。本当に大それた奴だ。牢に入れられても監守に向つてやツぱり謀叛むほんを勧めていやがる」

「おやおや、そんなことまでもしたのかね」

後ろの方の座席にじゅうにいた二十余りの男は憤慨の色を現わした。

「まあ聴きなさい。赤眼の阿義が訊問にゆくかね。あいつはいい気になって釣り込もうとしやがる。あいつの話では、この大清だいしんの天下はわれわれの物、すなわち皆みなの物だというのだ。ねえ君、これが人間の言葉と思えるかね。赤眼はあいつの家にたった一人のお袋おぶきがいることを前から承知している。そりや困っているにはちがいないが、搾り出しても一滴の油が出ないので腹を欠いているところへ、あいつが虎の頭を搔いたから堪らない。たちまちポカポカと二つほど頂戴したぜ」

「義哥あにきは棒使いの名人だ。二つも食ったら参っちまうぜ」
壁際の駝背がハシヤギ出した。

「ところがあの馬の骨め、打たれても平気で、可憐かわいそうだ。可憐かわい

「そうだ、と抜かしやがるんだ」

「あんな奴を打ったって、可憐かわいそうも糞もあるもんか」

胡麻塩ひげは言った。

康おじさんは彼の穿はきちがえを冷笑した。

「お前さんは乃公おれの話がよく分らないと見えるな。あいつの様子を見ると、可憐かわいそうというのは阿義のことだ」

聴いていた人の眼付はたちまちにぶつて来た。小栓はその時、飯を済まして汗みずくになり、頭の上からポツポツと湯気を立てた。

「阿義が可憐かわいそうだって——馬鹿々々しい。つまり気が狂ったんだな」

胡麻塩ひげは大おおにわかつたつもりで言った。

「気が狂ったんだ」

と、二十余はたちりの男も言った。

店の中の客は景氣みなづいて皆高笑みないした。小栓も賑やかな道連れになつて懸命に咳嗽せきをした。康おじさんは小栓の前へ行つて彼の肩を叩たたき

「いい包パオだ！ 小栓——お前、そんなに咳せいてはいかんぞ、い

い包パオだ！」

「氣狂きちがいだ」

と駝背だの五少爺も合点がてんして言った。

四

西せい関かん外がいの城の根元に靠よる地面はもとからの官有地で、まんなかに一つ歪ゆがんだ斜はすかけの細道がある。これは近道を貪る人が靴の底で踏み固めたものであるが、自然の区切りとなり、道を境に左は死刑人と行ゆき倒たうれの人を埋うずめ、右は貧乏人の塚を集め、両方ともそれからそれへと段々に土を盛り上げ、さながら富家ふけの祝いの饅頭を見るようである。

今年の清明せいめい節せつは殊の外寒く、柳がようやく米粒ほどの芽をふき出した。

夜が明けるとまもなく華大媽は右側の新しい墓の前へ来て、四

つの皿盛と一碗の飯を並べ、しばらくそこに泣いていたが、やがて銀紙を焚いてしまうと地べたに坐り込み、何か待つような様子で、待つと言つても自分が説明が出来ないのでぼんやりしている。と、そよ風が彼女の遅れ毛を吹き散らし、去年にまさる多くの白^し髪^{らが}を見せた。

小路^{こみち}の上にまた一人、女が来た。これも半^{はん}白^{ぱく}の頭で檻樓^{ぼろ}の著物^{はかま}の下に檻樓^{はかま}の裙^{はかま}をつけ、壊れかかった朱塗^{しゆぬり}の丸籠^{まるかご}を提げて、外へ銀紙のお宝を吊し、とぼとぼと力なく歩いて来たが、ふと華大媽が坐っているのを見て、真蒼^{まつさお}な顔の上に羞恥の色を現わし、しばらく躊躇していたが、思い切つて道の左の墓の前へ行つた。

その墓と小栓^{こみち}の墓は小路^{こみち}を隔てて一文字^{いちもんじ}に並んでいた。華大

媽は見てみると、老女は四皿のお菜さいと一碗の飯を並べ、立ちなが
 らしばらく泣いて銀紙を焚いた。華大媽は「あの墓もあの人の息
 子だろう」と気の毒に思っていると、老女はあたりを見廻し、た
 ちまち手脚を顫わし、よろよろと幾歩か退しりぞいて眼を睜おそつて、
 その様子が傷心のあまり今にも発狂しそうなので、華大媽は見か
 ねて身を起し、小路こみちを跨いで老女にささやいた。

「老ラオナイナイ、そんなに心を痛めないでわたしと一緒にお帰りな
 さい」

老女はうなずいたが、眼はやッぱり上ずっていた。そうしてぶ
 つぶつ何か言った。

「あれ御覽なさい。これはどういいうわけでしょうかね」

華大媽は老女のゆびさした方に眼を向けて前の墓を見ると、墓の草はまだ生え揃わないで黄いろい土がところ禿げしてはなはだ醜いものであるが、もう一度、上の方を見ると思わず**びっくり**驚いた。——紅白の花がハッキリと輪形わがたになつて墓の上の丸い頂きをかこんでいる。

二人とも、もういい年配で眼はちらついているが、この紅白の花だけはかえつてなかなかハッキリ見えた。花はそんなにも多くもなくまた活気もないが、丸々と一つの輪をなして、いかにも綺麗にキチンとしている。華大媽は彼女の倅の墓と他人の墓をせわしなく見較べて、倅の方には青白い小花がポツポツ咲いていたので、心の中では何か物足りなく感じたが、そのわけを突き止めた

くはなかつた。すると老女は二足三足、前へ進んで仔細に眼をと
おしてひとりごと独言を言った。

「これは根が無いから、ここで咲いたものではありません——こ
んなところへ誰がきましようか？ 子供は遊びに来ることが出来
ません。親戚も本家も来るはずはありません——これはまた、何
としたことでしょうか」

老女はしばらく考えていたが、たちまち涙を流して大声上げて
言った。

「ゆ瑜ちゃん、あいつ等はお前にみな皆罪をなすりつけました。お前は
さぞ残念だろう。わたしは悲しくて悲しくて堪りません。きよう
こそここで靈験をわたしに見せてくれたんだね」

老女はあたりを見廻すと、一羽の鴉からすが枯木かれぎの枝に止まっていた。そこでまた喋り始めた。

「わたしは承知しております。——瑜ちゃんや、可憐かわいそうにお前はあいつ等の陷かんせい穽せいに掛つたのだ。天道てんとうさま様が御承知です、あいつ等にもいずれきつと報いが来ます。お前は静かに冥ねむるがいい。

——お前は果はたして、しんじつ果はたしてここにいるならば、わたしの今話を聴取ることが出来るだろう——今ちよつとあの鴉をお前の墓の上へ飛ばせて御覧」

そよ風はもう歇やんだ。枯草かれくさはついついと立っている。銅線のようなものもある。一本が顫え声を出すと、空気の中に顫えて行ってだんだん細くなる。細くなつて消え失せると、あたりが死ん

だように静かになる。二人は枯草かれくさの中に立つて仰向いて鴉を見
ると、鴉は切立きつたての樹の枝に頭を縮めて鉄の鑄物いもののように立つて
いる。

だいぶ時間がたった。お墓参りの人がだんだん増して来た。老
人も子供も墳つかの間あいだに出没した。

華大媽は何か知らん、重荷を卸したようになって歩き出そうと
した。そうして老女に勧めて

「わたしどもはもう帰りましようよ」

老女は溜息吐ついて不承ふしようぶしよう々々くもつに供物を片づけ、しばらくため
らっていたが、遂にぶらぶら歩き出した。

「これはまた、何としたことでしょうか」

口の中でつぶやいた。二人は歩いて二三十歩も行かぬうちにたちまち後ろの方で

「かあ」

と一いっせい声叫んだ。

二人はぞつととして振返つて見ると、鴉は二つの翅はねをひろげ、ちよつと身を落して、すぐにまた、遠方の空に向つて箭やのように飛び去つた。

(一九一九年四月)

青空文庫情報

底本：「魯迅全集」改造社

1932（昭和7）年11月18日発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

その際、以下の置き換えをおこないました。

「彼奴↓あいつ 或↓ある 却って↓かえって 屹度↓きつと
呉れ↓くれ 此処↓ここ 此↓この 宛ら↓さながら 暫く↓し
ばらく 即ち↓すなわち 其↓その 只↓ただ 忽ち↓たちまち
丁度↓ちようど 一寸↓ちよつと て仕舞った↓てしまった

尚お↓なお 筈↓はず 甚だ↓はなはだ 又・亦↓また 未だ↓
まだ 丸切り↓まるきり 若し↓もし 矢ツ張り↓やツぱり 余
程↓よほど」

※底本内には「燈」と「灯」が混在していますが、そのままにしました。

※底本は総ルビですが、一部を省きました。

入力：京都大学電子テキスト研究会入力班（加藤祐介）

校正：京都大学電子テキスト研究会校正班（大久保ゆう）

2004年5月17日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.AOZORA.GR.JP/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

薬 魯迅

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫
著者 井上紅梅訳
URL <http://www.aozora.gr.jp/>
E-Mail info@aozora.gr.jp
作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU
URL <http://aozora.xisang.top/>
BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks
青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>